

# 戦国・中山王国文字考

— 字体・書きぶりを中心として —

横田恭三

## はじめに

一九七四年十一月〜七八年六月にかけて、河北省平山県で戦国時代中山国遺址の発掘が行われ、そこから秀麗な銘文が刻まれた青銅器を複数出土したことはよく知られている。<sup>①</sup>この地は靈寿古城（かつての中山国都）と呼ばれた場所で、五座の中山王族墓と百以上の平民墓を発掘し、二万件以上の文物を出土した。文字資料は主として、中山王響の陵墓にあたる一号墓から出土した鉄足大鼎・方壺・円壺・兆域図（銅板）・銅鉞などの金属器と玉器・木器などである。さらに王陵付近から発見されたと考えられるもので、長らく農家に

保管されていた（河光刻石）がある。<sup>②</sup>これらに記された文字の書きぶりは、①装飾性に富んだ書 ②標準的な書 ③実用通行筆写体の書の三種に分類することができる。<sup>③</sup>

現在、この遺址から出土した文物の一部が、二〇一四年六月にオープンした河北博物院に常設展示されている。本稿は、中山国の文字資料について書法上の考察を試みるとともに、見学の機会を得た河北博物院をあわせて紹介することとする。

### 一．河北博物院の概要

河北博物院は河北省石家荘市の東南にある市文化広場に位置する

省級総合博物館である。一九五三年に保定市にある古蓮花池院内に建てられたものがその前身で、一九八二年には石家荘市に移され、一九八六年に正式に河北省博物館としてオープンした。

現在、建物は南区と北区の二つの展示区に分かれる。北区は一九六八年に建設されたもので、このたび新装オープンしたのは南区(新館)である。南区の総建築面積は三三二〇〇平方メートル、六億二八〇〇万元をかけて建設された。収蔵文物は一五万件、一級品は三三四件、中山国王墓出土品のほか、前漢・滿城漢墓出土品の

河北博物院



河北博物院内の展示風景(山字形器)



収蔵でも知られている。

新館は、〈石器時代の河北〉〈河北商代文明〉〈燕趙故事〉〈古中山国〉〈滿城漢墓〉〈近代河北〉〈北朝壁画〉〈曲陽石雕〉〈名窯名瓷〉の九つの常設陳列に分かれている。〈古中山国〉は、南区二階西側の二つのホールに展示されている。展示面積は、一八四五平方メートル、展示文物は一四〇〇件にのぼる。第一展示場は「古国風貌」と銘打ち、国史・国都・経済・文化・征戦・王陵との六つのテーマとし、中山国特有の歴史や文化およびその民俗などの特色を打ち出している。第二展示場は「王室宝蔵」とし、青銅器・陶器・玉石器の三つのテーマに分け、遊牧民族の特色を色濃く反映している戦国時代の中山国の礼器・武器・日用器具・装飾品・明器などの文物を展示している。

なお、各展示コーナーには、参観者が随意に展示品の解説を視聴できるように、大型ディスプレイを設置している。

## 二. 中山国概略

中山国は短命な国家であったため、史書の記載はきわめて少なく、『史記』『戦国策』などに、断片的に「中山」の名が登場するのみである。春秋時代、鮮虞国の地であったものが、戦国の初め、中山国となった。『史記』(趙世家)に「趙献侯十年(前四一四年)、中山武公初立」とあるように、中山の武公は人民を率いて東部の平原に移動し、顧(今の河北定州市)に新都を建てたのである。ただし、

武公は初代の国君ではないことは、響墓出土の方壺の銘文中に「惟朕皇祖文、武、桓祖、成考」とあることから窺える。つまり、史書に明確な記載がないものの、武公より以前に文公が存在したのである。

また『戦国策』（中山）によれば、「中山與燕趙為王。斉閉関、不通中山之使。其言曰、我滿乘之國也。中山百乘之國也。何佗名於我。」とあるように、中山は燕趙とともに、王号を名乗った。これに対して斉はこれを嫌い、関門を閉じて中山の使者を通さなくした。そのときの斉の言い分は、中山は百乗の国なのになぜ我が万乗の国と同等に王号を名乗るのかと言ったのである。<sup>53)</sup>

百乘之国の中山が最終的に王と称することができたのは、斉・燕・趙がやむなく承認したからであるが、これはまぎれもなく中山の兵力や政治的地位が無視できないくらいに高かったからであろう。ついで、響王の前三一四年、燕国は内乱によって斉に攻め込まれた。中山国は機に乗じて燕との「王と称する同盟」を破棄して相邦（宰相<sup>しやうほう</sup>）を派遣、燕国の数十の城市を攻め、多くの財宝を奪取した。この事件は、後に述べる〈鉄足大鼎〉の銘文に記されている。響王の死後、姁盜が王位を継承したが、内政・外交の政策がうまく行かず、しだいに国力は衰退していった。

以上、中山国の歴史を概観してきたが、ここでもう一度簡潔にまとめてみたい。北方の少数民族によって建国された中山国は、前四〇六年、魏に滅ぼされるが、まもなくして国力を蓄えた桓公が強大な魏国に抗し、前三八〇年前後に再び中山国を復興し、靈寿（今

の河北省平山の東北）に都を移した。響王の前三一四年、内乱のあった燕国を討ち、燕国から多くの財宝を奪取した。その後、中山国は衰退し、やがて趙に滅ぼされるという運命を辿ったのである。

中山王世系（西暦年は大約）

文公…？…前四一五年

武公…前四一四年～前四〇七年

桓公…前四〇六年～前三四〇年

成公…前三三九年～前三二八年

王響…前三二七年～前三一三年

王姁盜…前三一二年～前二九六年

王尚…前二九六年～前二九五年

中山国の歴史は、中山君武公の建国（前四一四年）から趙に滅ぼされた戦国晩期（前二九五）までの、およそ二二〇年間になる。

### 三．中山国遺址出土の文字資料

靈寿古城の西城内の北部と西城の外側の地域が王陵区である。この範囲から合計六座の墓葬が発見されたが、その中のM1が中山王響墓（文物は東庫・西庫・北庫に収められていた）、M6が中山成王墓である。これら二つの大墓で出土した文物にはさまざまな文字資料が含まれていた。それを一覧表にまとめたのが、〈表1〉である。ここに掲載の1～53までの銅器銘文は、最大で四六九字、少ないものは一〇字～二〇字程度だが、中には一字しかないものもある。長

い銘文のものは、当時の中山国の具体的な事件・事柄を刻している。その書法技術について報告書は「刀法嫺熟、構字横堅剛直、円弧勻暢、刀鋒細鋭」と賞賛している。また銘文に使用されている語句は、おおむね『詩経』や先秦の經典中にみられるものである。

主な文字資料を以下に紹介する。

〔1〕鉄足大鼎(表No.1)：中山王罍鼎ともいう。通高五一・五cm、口径六五・八cm。鼎の脚部は鉄製、器体は青銅器製である。外側の腹部に最大六字ずつ七七行、全四六九字(うち重文一〇、合文二を含む)を環刻している。この銘文の冒頭に「惟十四年、中山王罍鼎を作る。云々」とあることを根拠に、前三一四年以後のものと考えられている。



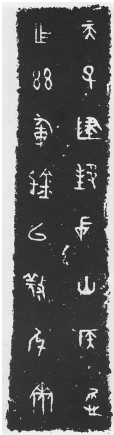
鉄足大鼎拓

〔2〕方壺(表No.2)：中山王罍方壺ともいう。通高六三cm、直径三五cm。器の四稜角部に一つずつ夔龍紋を付し、二面の腹部に鋪首銜環を貼り付けた方壺。四面の腹部に每面一〇行、計四五〇字の刻銘がある。銘文の冒頭に「惟十四年、中山王罍相邦の罍に命じ、燕の吉金を挾び、彝壺を鑄為せしむ。云々」とある。中山国王の代々の継承、相邦(宰相) 罍が王を補佐し燕を討った功績などが記されている。



方壺拓

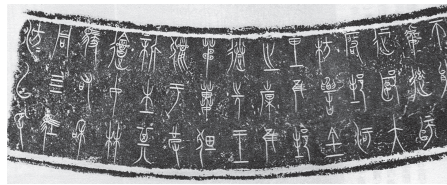
〔3〕円壺(表No.3)：好窳円壺ともいう。通高四四・五cm、腹围三三cm。外側の腹部に五九行、計一八二字の刻銘を環刻している。



銅鉞拓

〔4〕銅鉞（表No.4）：銅製の兵器。鉞に刻まれた銘文。征伐の際、王が將軍にさずけた斧の類である。結構は方形に近く、いって沈着な造形である。これも当時の標準体といえる。

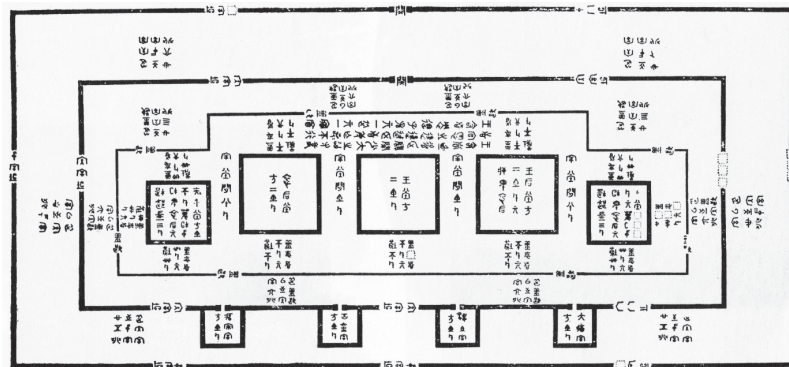
初行から二行目までとそれ以後とは、結構と字形にいくらか差異が見られる。おそらく二人の手になるものであろう。このほか圈足に十三年（王響一三年）に铸造したという製造年代を含む、官吏名や工人名など二四字を刻しているが、前半「十三年、左使庫、齋夫孫固、工墳、冢冢」と後半「一石三百卅九刀之冢冢」では字体が異なる（9頁下段図参照）。前半の字体は標準体、後半は通行体によって刻されている。本文の内容は、銘文の冒頭に「胤嗣の好蜜、敢えて揚んで告ぐ。云々」とあるように、響王の嗣子である好蜜が、父の徳を頌え、相邦（宰相） 嗣による伐燕の功績を記したものである。



円壺拓

〔5〕兆域図（表No.5）：九六×四八cm、厚さ〇・八cm、重さ三二・一kgの銅板に記された中山王響の陵園建築の設計図。建築物の大小・各部位の名称・中山王の詔勅が錯金銀法で嵌銘されたものである。図面の中心部にある五つの方形の堂の輪郭線は金線を嵌め込み、その内側や周辺に文字が嵌銘されている。なお、図面は、現代の地図の作り方とは違い、上方が南、下方が北になっている。

文字の結構は方形に作られていて安定感がある。この文字は銅鉞の銘文や円壺圈足銘文の前半部の書体と共通した書きぶりである。当時の標準字体といつてよからう。



兆域図（模写）

〈6〉銅扁壺・銅匣・銅鳥柱盆・銅円盒など（表No.6～52）：これらには、中山国が設置した官營の作業所で器物上に製造年代、監督官吏名、工匠の姓名が刻されている。これによって物品の生産管理が制度化されていたことがわかる。

〈7〉山、字形器（表No.53）：二号車馬坑より五件出土。高さ一・一九×幅七四cm、厚さ一・二cm。上部は三本の刃型状を呈し、下部の中間は円筒状の蓋（斧の柄を取り付ける穴）が開けられている。その蓋の外周に文字や符号が刻されている。文字は「左使庫、工暴」「左使庫、工蔡」五字。これらは〈6〉でも触れたように、生産部門と工匠名である。報告書では、山、字形器は、おそらく国の権威の象徴であろうと見ている。字体は当時の筆写体である。

〈8〉河光刻石：守丘刻石ともいう。この刻石は一九三五年前後、ある農民が一号墓に近い七波村の小さな丘で発見したものが、長らく農家に放置されていた。高さ九〇cm、最大幅およそ五〇cm、厚さおよそ四〇cmの自然石。その一面に一字約三〜四cmほどの文字が二行にわたって一九字が陰刻されている。文字は「監置右（圉）臣公乘、得守羔、其齒將曼、敢謂後乎。稽首」とある。内容は公乘得曼の二人が王の命を受け、この陵墓を管理していることを示したものである。この刻石によって当地が中山国の王陵であることが明らかとなった。

ややくだけた字体で、円壺圈足の後半に刻された銘文「一石三百

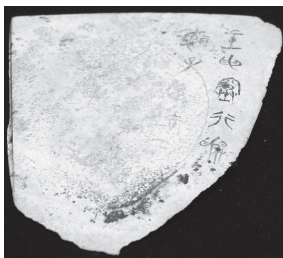
卅九刀之冢冢」と共通する書きぶりである。一行目に八字、二行目に一〇字を入れている。文字の大小、まばらな字間の取り方などから推測すれば、字配りに特段の腐心をせずに刻んだものであり、当時の通行体を用いて刻したものといえよう。



河光刻石

〈9〉玉器・木器

玉器二六、木器二件に記された墨書文字は、一〇〇余字であるが、報告書によれば、運筆は流暢で、字形は均整がとれ、転折に相当する部分は筆力雄勁であるという。墨書大理石片に書写された「壬申」や「行興」「子」などは、春秋晩期の盟誓である〈侯馬盟書〉を彷彿させる結構である。



墨書大理石片

## 四．文字資料の字体と書きぶりの考察

次に前章でとりあげた文字資料の字体と書きぶりについて、次のABCの三種に分類して検討してみよう。ただし、文字を比較するには、大まかな製作年代を把握しておく必要がある。これらが製作された年代にどの程度の開きがあるのか、分類に先だつて検討することにする。

鉄足大鼎と方壺は、王罍十四年（前三一四）以後、まもなくして造られたものである。その理由は、銘文中に記されているように、前三一四年、燕国を攻撃し、そのとき奪った「吉金」（銅）によって製造した礼器であるからである。円壺は、中山王罍の嗣子姁蛮によって製造されたものであるから、鉄足大鼎との年代差は最大で十八年である。次に兆域図であるが、その兆域図の銘文中に「王命罍：（中略）：其一従、其一蔵府」とある。これは兆域図が二枚有つて、一枚を随葬し、もう一枚を府庫に蔵したという意に解釈できる。李学勤氏はこの銘文に言及し、このことから平山一号墓は間違いなく中山王罍の陵墓だと断定し、この墓の年代は姁蛮と同じ時期で、前三〇九または前三〇八年からさほど遠くないものと指摘している。とすれば、前述の円壺製作はそれ以前のものということになり、その差は最大でも一〇年には到らないと考えられる。

円壺・方壺・鉄足大鼎・方壺の文字のうち、前半部と後半部の書風に差異がみられる。その理由はよくわからないが、製作年代がかけ離れている

ことは考えられない。また玉器の墨書に記された文字をみると、「集玉」「集它玉」「它玉」「吉之玉」以外に、「文君」「桓子」「平君」などの文字もある。「文君」はやや謹飭な筆法だが、他はほとんど筆写体を用いている。

守丘刻石は前述したように、内容は公乘得、曼の二人が王の命を受け、この陵墓を管理していることを示したものであるから、罍王の陵墓完成後、間もない時期に違いない。これら文字資料の年代差は、最大で一〇数年の違いでしかなく、よつて、製作された時期はほぼ同時代と見て差し支えない。

そこで前章三で解説した（1）～（9）の書風を比較して分類してみることにする。

A：きわめて裝飾性に富んだ意匠の書

（1）鉄足大鼎（2）方壺（3）円壺、これら三つの金属器は意匠性の高い書きぶりである。具体的に見てみよう。しなやかな細線を用いて脚部を長く伸ばした裝飾性豊かな作風である。李学勤氏はこれらの銘文を、かつて魏国布幣を出土した固圉村二号墓の骨飾上の漆書と比較して「字体もきわめて接近している」と述べている。こうした字形と書きぶりについて、新井光風氏は「罍鼎銘は芸術的な特徴を有する反面、左右相称の均斉がとれ、行間・字間・配字が一定し、特に長脚にみえる左右相称の精度は戦国時代に群を抜いていると言つてもいい」といい、さらに「あたかも小篆を想起させるような一面を有していることは、戦国から秦にかけての文字の発展

と伝承を知るうえで非常に興味深いことである」とも述べている。<sup>13)</sup>  
 西林昭一氏は「この暢達した趣は、これまでに例のない書法である」と高く評価している。また『中国書法芸術』に載せる「中山王罍鼎」の解説には「銘文書風、接近三晋文字、字形修長、勻称流美、用筆細膩纖巧、裝飾意味十分濃厚」と記している。<sup>14)</sup>『罍墓——戰國中山国国王之墓』（河北省文物研究所編、文物出版社・一九九六）では、「刀法嫺熟、横堅剛直、圆弧勻暢、刀鋒細銳、構字秀麗、粗細・深淺勻称」と述べ、これは工匠の技術の高さと鋭利な金属工具による産物であると記している。また銘文の語言について三晋の語言と基本的に同じと指摘している。<sup>15)</sup>

字間と行間とを均等に配字し、その字形は脚部を伸ばした豎長につくり、平行する豎画は背勢気味に作る。起筆は細く滑り込ませるようにながらしだいに肉厚にし、収筆に向かうにしたがつて細くなり、最後は針の先のようにして引き抜いている。ただし、横画はやや太めで短くかつ直線的である。こうしたしなやかな柳葉状につくる豎画と直線で太めの横画とのコンビネーションはきわめて理知的であり裝飾的である。文字に対する古代人の美意識の高さを窺わせるもので、こうした意識が、のちの小篆のような完成度の高い書体に反映されているものと考えられる。

主な文字をいくつか抽出してみたい。



王



夫



寧



開



於



寡

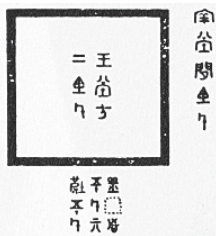
柳葉状の豎画

平行する豎画の背勢

長く伸ばす脚部

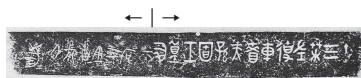
B：標準体

兆域図の銘文や銅鏡の銘文・円壺圈足銘文の前半部は、結構が方形で刻線も肉太につくっている。前述のような裝飾性は感じられないが、いたって方正で沈着な書きぶりである。つまり当時の標準体といつてよからう。



兆域図

(模写・「王堂方二百尺」部分)



円壺圈足銘文

C：実用通行筆写体

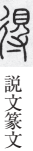
(a) 守丘刻石・円壺圈足銘文の後半部に記された文字は、かなりくだけた書きぶりである。それぞれの筆画の作り方によって、字形は不揃いになり、左右・上下のバランスも放逸になっている。当時の筆写体によって刻したものといえる。



守丘刻石

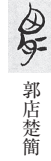


玉器の墨書



\*「得」は金文に見られる「彳」を省略。ただし〈説文篆文〉と同様に「寸」に一画つけている。

謂



\*「謂」の「言」は説文では堅画があるが、〈守丘刻石〉の方は省画されている。



\*「首」は上半部を「凶」につくる。この部分は西周金文と字形を異にする。

円壺圈足

「之家々」



「家」



説文篆文

\*「之家」は合文。「家」の「豕」部の筆画は金文や説文に比べ簡略化されている。

(b) 肉筆による筆者体

\*起筆を強く打ち込み、収筆ではスッと引き抜く。この筆法は〈侯馬盟書〉と共通する。

戦国期の楚地でも見られることであるが、公式な場を用いる書体（標準体）と草率な実用筆写体との別があるばかりでなく、より芸術性の高い装飾性豊かな書体が完成していたことがわかる。そしてこれらの文字を制作した者は中原の国家ではなく、北方の少数民族の白狄族鮮虞部によって建てられた国であったことも、特記されねばならない。さらに殷から周へと受け継がれてきた文字体系が少数民族の文字使用にも大きく影響を与えていただけでなく、戦国時期にはそれぞれの用途や目的によって字体が使い分けられており、その形体が少なくとも三種に分類できるのであった。

### おわりに

中山国は『史記』『戦国策』にその名が記載されているものの、その全貌はほとんど知られていなかった。一九七四年〜七八年にかけて発掘調査され、『文物』七九—一、張守中撰『中山王罍器文字編』などで紹介され、鉄足大鼎、方壺、円壺に刻された秀麗な字体が、世に知られるようになった。その後、文物出版社から『罍墓—戦

国中山国国王之墓」(上・下) が出版され、その全貌が明らかにされた。

本稿では前述の報告書を参考に、出土した文字資料の全体像を眺めた結果、少数民族が建国した国家ではあるが、殷周からの漢字文化を取り入れただけでなく、装飾性豊かな文字を創出していたことがわかった。また、文字の用途によって書きぶりに少なくとも三種の違いがあることも改めて示すことができた。

これをまとめれば、

Aメモリアルな要素がきわめて強い装飾性に富んだ字体

B殷周からの文字体系をそのまま受け継ぐ標準体

C実用通行筆写体(a金石などに刻された通行体、b肉筆による筆写体)

なお、これらの文字は、響王一四年(前三二四年ころ)のもの、もしくはその前後のものといえるため、秦始皇帝が全国を統一し、李斯に命じて小篆を制定させる以前、つまり、およそ九〇年〜一〇〇年ほど前にあたる北方で用いられた貴重な文字資料といえることができる。

最後になったが、本稿は平成二十六年度の跡見学園後援会外国出張助成費給付を受けて研究調査した成果の一部である。ここに記して関係各位に感謝申し上げる。(二〇一五年一月稿)

## 註

- (1) 『文物』一九七九年第一期に「河北省平山縣戦国時期中山国墓葬発掘簡報」と題する報告がある。
- (2) 河光刻石は一九三五年前後にすでに発見されていたが、農家にながらく置かれていた。その後、一九七四年からの発掘作業にあたっていた考古チームに持ち込まれたものである。
- (3) これは戦国期の他の国にも窺えるもので、とりわけ特殊ということではない。例えば、楚地出土の「曾侯乙墓」でも同様なことがいえる。
- (4) 『史記』卷四十三(趙世家第十三)に記載。
- (5) 『戦国策』(中山卷第十)に記載。
- (6) 中山成王墓(第六号墓)は盗掘を受けており、椁室内は破壊されていた。文字資料は漆盒の蓋に針で刻された「廿一年左庫」。
- (7) 前出註1に同じ。
- (8) 李学勤「平山三器与中山国史的若干問題」(『考古学報』一九七九—2所収)
- (9) 『響墓—戦国中山国国王之墓』(上・下)(河北省文物研究所編・文物出版社・一九九六)
- (10) 前出註8に同じ。
- (11) 李学勤「平山墓葬群与中山国的文化」(『文物』一九七九年—1所収)
- (12) 新井光風「中山王罍鼎銘」(『書品』第二六二号、東洋書道会、一九八二年)
- (13) 西林昭一「中国新出土の書」39頁(二玄社、一九八九年)
- (14) 谷谿編著『中国書法芸術』(文物出版社、一九九三年)「中山王罍鼎」(184頁)。なお、三晋とは魏・趙・韓の三国をいう。
- (15) 前出註9に同じ。

表一 文字資料一覧表 A：装飾書体 B：標準書体 C：実用通行筆写体

番号	器物名	部位	字数	刻文	書体	備考
1	鉄足大鼎	外周壁	469	惟十四年、中山王譽作鼎于銘日…	A	
2	銅方壺	壺身四壁	450	惟十四年、中山王譽命相邦賜…	A	
3	紆盜凹壺	腹部 圈足	182 24	胤嗣紆盜敢明揚告… 十三年、左使庫、齋夫孫固…	A B・ C	前22行と後半の字異なる 前14字と後半10字異なる
4	銅鉞	鉞の前部	16	天子建邦、中山侯急作茲軍鉞…	B	豎2行
5	兆域図銅板	板の全面	450	王堂方二百尺。…	B	
6	銅扁壺	圈足	19	七祀、冶鈞齋夫啓重、工弧。…	B	横1行
7	銅匱	口辺側面	19	八祀、冶鈞齋夫啓重、工哉。…	B	横1行
8	銅烏柱盆	圈足側壁	10	八祀、冶鈞齋夫孫苾、工酋。	B	横1行
9	十五連蓋銅燈	円座側壁・ 燈柱立壁	25	十祀、左使庫、齋夫事敦、工弧。…	B	横1行
10	銅円盒	口下部側壁	21	十祀、左使庫、齋夫事敦、工哉。…	B	横1行
11	銅盤	上部側壁	12	十祀、右使庫、齋夫郭癩、工慮、冢。	B	横1行。文字にゆがみ有り
12	銅円壺	圈足立壁	20	十祀、右使、齋夫呉丘、工冑。…	B	横1行
13	有柄銅箕	柄部と口辺	10	左縣者、十祀、右使庫、工疥。	B	横1行
14	銅円壺	圈足側壁	21	十一祀、右使庫、齋夫郭癩、工角、…	B	横1行
15	銅盃	腹部	20	十一祀、右使庫、齋夫郭癩、工觸、…	B	横1行
16	銅盃	腹部	24	十二祀、右使庫、齋夫郭癩、工塵、…	B	横1行
17	銅円盒	側壁	23	十二祀、右使庫、齋夫郭癩、工処、…	C	横1行
18	銅扁壺	圈足側壁	22	十二祀、左使庫、齋夫孫固、工青卩、…	C	横1行
19	銅円壺	器足上	23	十二祀、左使庫、齋夫孫固、工墳、…	B・ C	横1行。前13字鑄造、後10字器成後に刻す。
20	銅円壺	圈足側壁	20	十二祀、左使庫、齋夫孫固、工墳、…	B・ C	横1行。前10字鑄造、後13字器成後に刻す。
21	銅提鏈円壺	圈足側壁	23	(十)三祀、左使庫、齋夫孫固、工上、…	B・ C	前10字鑄造、後13字器成後に刻す。
22	小銅円壺	圈足側壁	18	瑱、十三祀、左使庫、齋夫孫固、所製…	C	横1行。「瑱」字のみ横刻
23	銅勺	柄部	各8	十三祀、右使庫、工疥。	B	同文2件
24	金銀泡飾	背面	12	十三祀、私庫、齋夫煮正、工孟鮮。	B	環刻

25	銀銅泡飾	背面	12	十三祀、私庫、畜夫煮正、工顯廂。	B	環刻
26	銀銅泡飾	背面	12	十三祀、私庫、畜夫煮正、工陞面。	B	環刻
27	金銀龍鳳方案	沿口処	12	十四祀、右使庫、畜夫郭瘡、工疥。	B	横1行
28	銅錯銀双翼神獸	腹部	14	十四祀、右使庫、畜夫郭瘡、工疥、冢冢。	B	横1行
29	銅錯銀双翼神獸	腹部	12	十四祀、右使庫、畜夫郭瘡、工疥。	B	横1行
30	銅錯銀双翼神獸	腹部	14	十四祀、左使庫、畜夫孫固、工黑、冢冢。	B	横1行
31	銅錯銀双翼神獸	腹部	12	十四祀、左使庫、畜夫孫固、工蔡。	B	横1行
32	小帳銅活動接管	側壁	7	十四祀、左使庫造。	C	豎2行
33	銅鏈	側壁	7	十四祀、左使庫、工。	C	豎1行
34	円帳銅接扣母扣	接口処	12	十四祀、左使庫、畜夫孫固、工墳。	B	横1行
35	円帳銅接扣子扣	器上		一、二、三、四、五、六、七、八、九、十	?	1字ずつ刻す
36	銅鑲嵌紅銅松石方壺	腹部	16	十四祀、兎器、畜夫毫更、所製…	C	横1行
37	銅鏡	鏡上	16	十四祀、兎器、畜夫□□、所製…	?	文字不明瞭
38	銅錯金銀虎噬鹿、同牛、同犀、屏風挿座	腹部	12	十四祀、牀麈、畜夫徐哉、製省器。	B	豎1行、「犀」のみ豎3行
39	銅帳檄	上部側面	11	十四祀、牀麈、畜夫徐哉製之。	C	豎1行～3行
40	銅車（車口）	?	11	十四祀、私庫、畜夫煮正、工逼。	B	豎1行（やや湾曲）
41	銅升鼎ほか5器	?	5	左使庫、工黑。	B	横1行
42	銅升鼎ほか5器	?	5	左使庫、工弧。	C	横1行
43	銅升鼎ほか5器	?	5	左使庫、工蔡。	C	横1行
44	銅陪鼎ほか3器	?	5	左使庫、工墳。	C	横1行、銅匕のみ豎1行
45	銅鬲	?	4	左使庫弧。	C	横1行
46	木棺銅鋪首	?	5	左使庫、工□。	C	豎2行
47	木槨銅鋪首	?	3	左工墳。	C	右半分に環刻
48	木槨銅鋪首	?	3	左工蔡。	C	右半分に環刻
49	木棺銅鋪首	?	1	君	C	
50	木槨銅鋪首	?	1	王	C	
51	木框錯金銀銅接扣	上両角	1	上、王、君のいずれか	C	
52	狗金銀項圈	背面	2	ム庫	?	18枚ともに「ム庫」を刻す
53	銅山字形器	蓋部	5	左使庫、工黑。 または左使庫、工蔡。	C	